

般若經における「空とその同類語」について（森 山）

一一四

般若經における「空とその同類語」について

森 山 清 徹

ここにいる同類語とは、広義の同義異語及び関連語を含むもので、これらの言葉を拾うことによつて空の概念をより明確にすることを目的とすると共に、般若經とりわけ初期の般若經に於ける空の意味を究明したい考えである。

「空 (śūnyā) であるところとは、また無尽 (akṣaya) であるところである。空性 (śūnyatā) であるところとは、また無量 (aprameyā) であるところである。それらに区別はない。したがつて空は無尽は無量という等式が成り立つ。また「無重 (aprameyam) であるのは空性の (śūnyatāyā) 呼び名 (adhiśvaanam) である。それは無相の (animitasya) 呼び名である。無量であるのは無願の (apranīhiṣasya) 呼び名である。同様のことを小品般若にも言つてゐる。つまり無量は空性は無相は無願である。」

なお無量・無数につづいて般若經自身が語義解釈を行つてゐる。「無量であるのは、そこで於て諸の計量がなされるからである (pramāṇāny uparante) 無数 (asaṃkhyeyam) であるのは計算とちがひな、さへいへずいふべきならぬからである (yan na śakyam saṃkhyayā pi kṣepayitum) 」。同様に「甚深 (gambhīram) であるのは空性の (śūnyatāyā) 呼

び名 (adhiśvaanam) である。また甚深であるのは無相の (animitasya) 無願の (apranīhiṣasya) 無作の (abhisamkārasya) 無起の (anupādasasya) 無生の (ajān) 無存在の (abhāvasya) 離欲の (viragasya) 寂滅の (nirodhasya) 涅槃の (nirvāṇasya) 遠離の (vīgamasya) 呼び名である。」「また、甚深であるのは、それはすべてのものの (sarvadharmāṇām) 呼び名である。」「世尊よ、ものの (dharmāṇām) 本性 (prakṛti) は甚深です。世尊は言つた。須菩提よ、遠離性 (vivikatai) であるからである。」「このように甚深以下寂滅・涅槃・遠離ならに先の無量・無数というのは空の同義異語にはかならず、その意味するところは存在の実相とは我々の認識によつて量り知れないところのものとあるところのことを言い表わさうとしたものである。それが即ち以下のやうにいわれる所以である。」「却 (rūpaṃ) もまた不可思議 (acintyam) であり、無比であり (anulyam) 無量であり、無数である……実色色は法性 (dharma) であるが、そこで於ては (cittam) 思は (cetana) 心所となるから (cātasikā dharmā) (法性) 相即なるのである (ratulana) 」。同様に「無量 (adhiśvaanam) であるものを挙げて、實際 (bhūtakoti) 真如 (tathatā) 法性 (dharma) 法界 (dharma) 無染 (asamkleśa) 不可思議 (acintya) 寂靜 (śānta) 無比 (atulya) 無特微 (alakṣaṇatva) 無染 (anīṣṭa) 清淨 (viśuddha, parīśuddha, prabhāsava) 無垢性 (asvabhāva) 無本性 (apākṛti) 不二 (advaya) 無異 (abhinnā) 無二 (advaidhikara) 無斷 (acchinna) 無分別 (avikalpa) 平等 (samatā) 無執着 (asaṅka) 不繫 (aparyāpanna) 不可得 (anupalambha) 虛空 (ākāśa) 夢 (māyā) 夢 (svapna) 響

(pratisrutka) 影 (pratibhasa) 陽焰 (marici)

このように般若経に於いては空及びその同義語をもつて存在の真相が説明されている。しかし空ということば自体表現にすぎず、存在の真相はことばによつて表わすことができないところのものである、とするのが般若経の真意である。すなわち「すべてのものは (sarvadharmā) ことばで説くことばで言ふことば (anābhigpyān) とするのには、またすべてのものの空性であるところのことば (sarvadharmān śūnyatā) 説くことばで言ふことば (na sa śakyā' bhijapitum)」

ところで一般に空の意味とは、すべてのものは因縁によつて生じたものであつて、固定的実体がないということ。このことを縁起していることであるとし、縁起と同じであると説明される。そこで般若経では空と縁起とはどのような関係にあるかということをもてみる。その前にまず竜樹の場合を検討すると、中論に於て「われわれは、縁起であるものを空性である (pratyasamutpadah śūnyatām) と語る。」廻靜論では「ものが他によつて存在すること (pratyabhāva) が、空性の意味である。また他によつて存在するものは無自性 (asvabhāvatva) である。」このように竜樹にあつては空と縁起及び無自性とは同義語である。さらに caṇḍrakīrti によれば「縁起の故に空である。」「縁起の故に無自性である。」「無自性の故に空である。」といった空と縁起と無自性と論理的関係を明瞭に表わしている。

一方、般若経では最初の部分では空は縁起によつて説明されてはおらず、空は素朴に説かれているにすぎない。また縁起の語は全体を通してそれほど多くはみられない。八千頌般若16章最後で「菩薩

般若経における「空とその同類語」について (森 山)

摩訶薩は順と逆の縁起を観察しなければならない。」とある。ところがこれと相当する箇所には、道行般若、小品般若、大般若第五会にはこの内容を示す文はなく、仏母生般若には「隨順緣生觀察諸法」大品般若には「自逆順觀十二因緣。」とある。また八千頌般若17章で、わずかに縁起の語はみられるが、漢訳小品系般若、大品般若には全くない、八千頌第19章冒頭に於て「縁起は甚深である。」とあり、道行、小品、第五会、放光、大品等にも同様にある。しかし空には言及されていない。八千頌第28章後半部に於て唯一、縁起についての詳説がみられ、かつ空にも闡説している。道行や小品でも同様である。ところで般若経には二度囑異品があるが、第一の囑異品で一度般若経は完了しているといわれる。先の唯一の縁起と空についての説明は第一の囑異品の終つた直後に現われる。このことは空と縁起とは般若経の最終部分(第一の囑異品以降)になつて結びついたものであつて、最初からではないことを意味する。したがつて般若経に於いては最初から空と縁起としては説かれていなかったということが出来る。この点、般若経の空と竜樹及び中觀派の空とはその内容を異にするのである。初期の般若経における空とは、すべてのもの(五蘊)を対立概念(常—無常、我—無我、苦—樂、淨—不淨、空—不空)によつて区別する思维のあり方に対して、一説によれば北伝アビダルマの法の理論に対して、すべてのもの(五蘊)それ自体は、思维とはかわりがない、量り知れないもの(無量、無數、甚深)であるということをやわんとした警句である。そこでは、まだ空の意味として、すべてのものは縁によつて起つており相依相生であるということは明確には述べられていないのである。紙幅が尽きたので注は割愛する。